

大阪が東京を超え、京都、兵庫も過去最高を更新！新型コロナウイルスの感染者が私たちの生活圏でも不気味な増加数を示し始めた中ですが、6人が元気な顔を見せ合えたのはうれしい事でした。今回の輪読対象は、内容が全く伝わらない第二十二巻。このため第一巻付録の兵藤裕己解説「太平記の成立」の全文を読みました。現代語とはいえ、難解な部分もあって、結構な歯ごたえでした。

はじめに (P453～458)

太平記は君(天皇)と臣、君と民をめぐる二つの物語を展開しており、近世の幕藩国家、近代の天皇制国家の形成にも深い影響を及ぼした。中国の史書、儒学の経書類、漢詩文、日本の神道・仏教関係故事、朝廷の年中行事、有職故実など文化百般の教養書でもあり、和漢混淆、雅俗折衷の文体は、言文一致体が流行する明治以前の文章語のスタンダードとなった。

今川了俊の太平記批判 (P458～463)

太平記の成立過程を探る基本的な資料のひとつは、今川了俊の「難太平記」である。了俊は足利一門の有力武将で、南朝の九州拠点「西征府」の攻略に貢献した。その父範国、兄範氏は尊氏に従って数々の戦功を挙げたのに太平記に反映されていないと難じ、幕府の改訂による今川氏の名誉回復に強く期待している。

太平記の成立過程 (P463～467)

了俊によると、太平記は法勝寺の恵鎮上人が足利直義に持参した三十余巻が原本。これを学僧の玄惠法印に読ませると、誤りや不適切の多いことがわかり、直義は公表を禁じて改訂作業を進めた。直義の失脚で作業は中断したが、三代將軍義満の代に再開し、漏れていた事績が書き継がれた、という。したがって太平記は、最終的には室町幕府の草創を語る正史に準じる書として整備・編纂されたとみることが出来る。

もう一つの作者説 (P468～472)

北朝公家の日記の応安七年(1374)五月三日条に「小嶋法師が死んだ、という。今評判の太平記作者で、身分は低い(卑賤の器)」が、名匠の聞こえが高

い。惜しい」という記載がある。太平記成立直後の有力な作者情報だが、どんな人物か不明。琵琶法師のよいうな「読みの芸」とのつながりが考えられる。

恵鎮の役割 (472～476)

直義に太平記の原本を持参した恵鎮は、天台の戒律復興運動をリードした僧で、後醍醐天皇の討幕運動へのかかわりでは、南都西大寺系の律僧文観と対を成す存在だった。恵鎮は、京白河の大寺法勝寺の大勧進をつとめるほどの器量と幅広い人脈を持ち、太平記の原作者候補と考えられる資格は十分に備えている。

成立過程の重層性 (P476～481)

了俊は「難太平記」で「この記の作者は宮方深重の者にて」と評している。しかし、第十二～十三巻では、後醍醐と側近の奢り、慢心と建武政権の乱脈ぶりが厳しく批判されており、足利政権による改訂をうかがわせる。また、楠正成物語の生成には談義・講釈する物語僧の関与が想像されるなど、太平記の成立過程には諸階層の立場が重層して映し出されている。

二つの立場 (482～486)

太平記の第二十二巻が欠けていることについて、近世初頭の注釈書「太平記評判秘伝理尽抄」は、この巻は児島高德が足利兄弟の悪逆を記しているため、幕府の管領細川頼之が諸国を尋ね求めて焼き捨てたと説明している。異質な立場の葛藤説としておもしろい。

小嶋法師とはだれか (P486～488)

児島高德にせよ小嶋法師にせよ、法師形の「卑賤の器」たちの存在を抜きに太平記の起源は語れない。

第24巻輪読予定(来年1月18日)

- 1) 73 暦応三年～73 足らざりけり
74 高野より～76 したりける
- 2) 77 その比～80 止めてけり
- 3) 80 さればとて～82 聞こえたる
- 4) 82 盛長～85 問うたりける
- 5) 85 その時～88 居たりける
- 6) 95 同じき四日～98 吹き送る
- 7) 98 夜に入り～101 向かひける
- 8) 101 さる程～105 たりける
- 9) 105 その十七～107 たりける
- 10) 107 暫く～110 帰りける

この巻の特定箇所は、5)とします。